

序論)

ある電車に小さな赤ちゃんをつれたお母さんが乗りました。最初は、赤ちゃんは寝ていて静かにしていました。ところが、電車が揺れたからでしょうか、その赤ちゃんは起きてしまい。大きな声で泣き出してしまいました。お母さんは赤ちゃんを泣き止ませようと、優しく笑顔で赤ちゃんに語りかけます。ところが、お腹がすいていたのでしょうか、赤ちゃんはなかなか泣き止みません。

すると、隣にいたヤンキー風の若者が、「うるせえ」「早くなきやませろ」と強めの声でいいました。でも、赤ちゃんは泣き止みません。お母さんは恐縮するばかりです。その若者はそれ以上は怒鳴りませんでしたが、小さな声で「公共の乗り物なんだから、静かにしていることができない子供をつれてくるなよな」とボソッといいました。

みなさんはこれに対してどう思いますか？ 「赤ちゃんは泣くことが仕事なんだから、そんな風にいう必要はない」と思われるのでしょうか。それとも、この若者の言うように「周りに迷惑をかけるんだから、赤ちゃんなんて電車に乗せるべきではない」と思われるのでしょうか。ネットでは、驚いたことにこの事について賛否両論がありました。

私などは、赤ちゃんは泣くのが当たり前だし、公共の乗り物なんだから赤ちゃんにも乗る権利があるので、こんな事でギャーギャーいうのはおかしいと思うのですが、一方で他の人に迷惑になるような事にならないように配慮するべきだということも、受け入れがたいですが、一理はあるように思えます。

私達の人生にはこのようにどっちとも言いきれないような問題がよく起こります。私達はその時、どういった基準で物事を判断し、どのような選択をしていくべきなのでしょう。

今日は、このようなどっちとも言えないような問題。どちらでも良いように思えるような問題について、キリスト者がどのように判断し振る舞っていくのかを聖書から教えられていきたいと思います。

前回の振り返り)

まずは簡単に前回の振り返りをしましょう。前回、パウロは「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てる」と語り、信仰生活の中心は知識ではなく愛にあることを教えていました。

というのも、当時のコリント教会には偶像に献げられた肉に対してどのように振

る舞ったらいいかを迷っている人たちと、偶像に献げられた肉であっても気にせず自由に食べていた人たちがいたからです。その肉のことを気にせず食べていた人たちは、偶像など本当に実在する神ではなく、神は唯一の神、主イエスキリストの神しかいないことを知っていました。だから、一切気にすることなく自由に肉を食べていたのです。でも、パウロはそのような人たちに対して、彼らの知識が彼らを高ぶらせていると語り、大切なのは愛によって人を育てることだと教えました。

しかし、パウロは彼らの知識を否定しているわけではありませんでした。パウロは「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」（4節）ことを認めているし、パウロ自身も知っていると述べています。

では、なぜその正しい知識にたって行動している人たちをパウロは注意したのでしょうか。それは、その知識によって他の人が傷ついたり、躓いたりしてしまう可能性があったからです。

1) 知識を使う上での注意点（7-9節）

パウロは最初に知識を使う上での注意点を上げています。

8:7a しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。

当たり前のことですが、私達みんなが同じ知識を持っているわけではありません。信仰歴が長い人は、何が正しくて何が間違っているか。何がキリスト者的な行動で何がそうでないかを知っています。でも、救われたばかりの人は、この偶像が多い日本の文化の中で、キリスト者として何をするのが正しくて、何をするのが間違っているのかわかりません。例えば、日本の多くの家が引き継いできた仏壇をどうしたらいいか、イエス様を信じる前から家にある神棚をどうしたらいいか、救われたばかりのキリスト者は迷います。私のようなキリスト者家庭に育った者にとっては、そういったものは処分してしまったらいいと簡単に思いますが、何十年も毎日仏壇や神棚に手を合わせて生きて来た人たちにとっては、そういったものを処分することは一大決心であったりします。

私達は皆、同じ知識、同じ判断基準を持っているわけではないのです。

その上で、私達が注意しなければいけないのは偶像の文化で育った人は、すぐには正しい知識と正しい判断力を持っていないということです。

8:7b ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食

べて、その弱い良心が汚されてしまいます。

「弱い良心」というのは正しい判断力を身につけることができていない状態を指します。長年、アポロとか、ゼウスとか、アフロディーテといったギリシャ神話の神を拝んでいた人たちにとって、イエス様を信じて救われた後でも、そういった偶像の力は恐ろしいものでした。だから、偶像に献げられた肉を食べるとその偶像の力を取り込んでしまうのではないかと恐れていたのです。しかし、私達キリスト者はそういった食べ物によって霊的な影響を受けることはありません。パウロが 8 節で言っている通りです。

8:8 しかし、私達を神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。

だから、偶像に献げられた肉は食べても、食べなくても、霊的にはどっちでもいいものなのです。でも、最初に確認したように、こういった知識は同じ教会に通っている人同士でも、すべての人が持っているわけではありません。では、どうしたらいいのでしょうか？ パウロは 9 節のように言っています。

8:9 ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまづきとならないように気をつけなさい。

「この権利」というのは、偶像の肉を食べても食べなくてもいいという自由に振る舞える権利です。私達は、聖書が明確に罪と定めていない事、もしくは明確にこれをやりなさいと命令していない事に対して、好きな方を選んで良い権利を持っています。でも、その権利を使うときには、「弱い人のつまづきとならないように気を付けなさい。」とパウロは言うのです。

みなさん、この世の人たちは自分に与えられた権利を、自分のために使います。でも、キリスト者はそれではいけないのです。私達には多くの権利や自由が与えられていますが、それらを使う時には、信仰的に弱い人のつまづきになっていないかを注意しなければいけないのです。

なぜでしょうか？ それは私達が間違った知識の使い方をすると、悪い影響を弱い人に与えてしまうからです。

2) 知識の間違った使い方とその影響 (10-12 節)

パウロはその知識の間違った使い方による悪い影響について 10 節から 12 節で説明しています。

8:10 知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようにならないでしょうか。

みなさん、偶像をいままでずっと拝んでいて、その力を恐れてきた人、そして、偶像に献げられた肉には何等かの偶像の力が働いているのではないかと思っている人が、教会の先輩がなんの心配もせず、平気な顔で偶像に献げられた肉を食べているのを見たらどうなるのでしょうか？ 何も気にしないで食べている人は、偶像には力がなく、偶像に献げられた肉もただの肉であることを知っていて食べています。でも、それを見ている救われたての人は、「偶像の力があるかもしれない肉を先輩キリスト者が食べているんだから、偶像に対してそんなに神経質にならなくてもいいんだ。偶像の影響を受けたとしても気にしなくてもいいんだ。」というふうにはならないでしょうか。そして、結果として偶像文化に妥協した生き方をしてしまわないでしょうか。

もし、知識を持っている先輩クリスチャンの振る舞いで、教会の子供や救われたてのクリスチャンを誤解させて、偶像から離れる生き方を妥協させてしまったとしたらどうなるのでしょうか。それはその人を、この世の支配、サタンの支配から切り離すために死んでくださったキリストの十字架を無駄にすることになります。

つまり、それは先輩クリスチャンの振る舞いによって誤解したクリスチャンを滅びの方向に導くことになるのです。ここでいう滅びとは「永遠の滅び」のことではなく、信仰的衰退のことを指しています。

せっかく救われたのに、私達の間違った行動によって誤解を与え、信仰的な妥協を兄弟姉妹に生み出させたとしたら、それはその人を霊的に傷つけるだけではなく、キリストに対して罪を犯すことになるのです。パウロが 12 節で行っている通りです。

8:12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。

みなさん、私達、福音派のクリスチャンは、タバコやお酒をのむことを控えています。なぜでしょう。聖書をみるとタバコを吸ってはいけないとか、お酒を飲んではいけないとは書いていません。お酒については酔ってはいけないということ

は書いていますが、お酒自体を完全に禁止するようなことばはありません。それなのに多くのクリスチャンはお酒を飲んだり、タバコを吸うことを控えています。なぜでしょうか。それは聖霊の宮として自分たちのからだの聖さを保つためであり、信仰的に弱い人を躓かせないためです。

あるところにクリスチャンのサラリーマン、Aさんがいました。その人はお酒もタバコもとらないで、聖書をよく読み、休み時間には人目のつかないところでお祈りをよくする人でした。ある時、会社が主催した飲み会の場にAさんも行きました。彼はお酒をのみませんが、人間関係のため、お付き合いのために行ったのです。しかし、その時、彼に対して非常に熱心に、何回も何回もお酒を勧める人がいました。「みんなお酒を飲んでいるのに、お前のグラスだけお酒がはいっていないのは場をしらけさせるから、一口だけ、舐めるだけでもいいから、お酒を持て」そういつて彼にお酒を勧めました。Aさんは最初、断っていたのですが、「まあ、舐めるぐらいならいいか。お酒自体が罪というわけじゃないから、ここはみんなに合わせてもいいだろう。」と思って、本当にちょっとだけ、お酒を舐めました。

ところが、その人のことをずっと見ていた人がいたのです。その見ていた人のことをBさんとしましょう。Bさんは昔、教会学校にいったことがあるけど、今は教会には全然行っていない人です。でも、クリスチャン生活に興味がありました。だから、熱心なクリスチャンとして有名なAさんを注目していたのです。でも、Aさんがお酒をちょっと舐めるのをみて非常に残念に思ったそうです。そして、Bさんは帰り際、Aさんにいったそうです。「わたしはあなたがお酒を舐めるのを見ていました。熱心なAさんでも、クリスチャンの信仰というのはその程度なんですね。非常に残念です」Aさんはこれを聞いて非常に後悔し、家で【主】に悔い改めの祈りをしたそうです。

お酒やタバコに限らなくても、私達には自由な選択が委ねられていることが多くあります。何を食べ、いつ寝て、どこに行くのか、その多くについて私達は、自由にする権利を持っています。でも、その権利を自分のために使っていくとき、私達は知らぬ前に、信仰的に弱い人を躓かせたり、傷つけたりしているのではないのでしょうか。

私は小さいころ、「ゲゲゲの鬼太郎」とか、「悪魔くん」といった妖怪もののアニメを見ることを禁止されていました。また、ファミコンも買ってもらえませんでした。それはアニメをみたり、ゲームをすることが罪だからではなく、おばけや妖怪に本当に力があるかのように私が誤解したり、ファミコンにのめり込みすぎて、それが私にとって偶像にならないようにするためでした。私の父は、私がそのように躓かないために制限をかけたのです。

3) パウロの決心 (13 節)

私達は、聖書を知れば知るほど、何が明確に禁止されていることで、何を私達はしなければいけないかがわかります。そして、そのように聖書で明確に禁止や命令をされていること以外については、自由にする権利が与えられています。問題は、その権利をどのように使うかです。

パウロはこれに対して一つの力強い決心を述べています。13 節を読みましょう。

8:13 ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。

ここでパウロが言う「決して肉を食べません」の「決して」は「永遠に」「ずっと」という意味の言葉が使われています。ユダヤ人は元々遊牧民族ですから、お肉をよく食べる人たちです。そのユダヤ人であるパウロが、お肉を永遠に食べないと宣言しています。なぜでしょう？ それが教会の兄弟をつまずかせる可能性があるからです。

みなさん、これが正しい知識の使い方であり、自由の使い方なのです。私達は【主】を知れば知るほど、その高さ、広さ、深さをよく知ることができます。また、神様が何を喜んでくださって、何を悲しまれるのかを知ることができます。

でも、聖書を知れば知るほど、律法主義という間違った傾向に進む可能性があります。実際、パリサイ人や律法の専門家がそうでした。彼らは聖書を学び、聖書をよく知ったことによって聖書が明確に禁止していないことまで禁止するようになり、明確に命じていないことまで、やらなければいけないこととしてルールを作りました。その上で、それらを守っている自分は正しいと、自分の正義を誇っていたのです。

でも、【主】が教えてくださる知識はそのように用いるものではありません。知識は自分の正当性を主張するために用いるのではなく、【主】を愛し、隣人を愛し、教会を建てあげるため、共に歩む人々の信仰成長を助けるために用いる事が正しい使い方なのです。

だからこそ、私達の言動が信仰的に未熟な人や、教会の子どもたちにとってつまづきになっていないかを気をつける必要があります。たとえ、正しい知識に基づいた行動であったとしても、誤解されてしまったら、それは信仰的に躓きになり、霊的な妥協へと繋がってしまうこともあるのです。

みなさんの言動は、生まれたばかりのクリスチャンや、教会の子供たちの正しい

模範になっているのでしょうか。それとも信仰的妥協を促すものになっているのでしょうか。私達は【主】によって与えられた知識を、自分のため、自分の正義のためではなく、【主】にある兄弟姉妹のために用いていくべきではないのでしょうか。

結論)

私達の言動は、常に誰かが見えています。特に、信仰に入っただけの方々や、教会の子どもたちは、先輩クリスチャンの姿を見て、何が正しいキリスト者の生き方なのかを学んでいます。私達の何気ない行動が、彼らを霊的に成長させることもあれば、逆につまずかせ、信仰的妥協へと導いてしまうこともあるのです。

ですから、私達は自分の権利を主張する前に、まず問わなければなりません。「この行動は、信仰的に弱い人をつまずかせないだろうか」「私の選択は、兄弟姉妹の信仰成長の助けになるだろうか」と。

主イエス・キリストは、私達を罪とサタンの支配から解放するために、ご自身の命を犠牲にしてくださいました。その尊い犠牲によって救われた兄弟姉妹を、私達の自己中心的な自由の用い方によってつまずかせるなら、それはキリストに対して罪を犯すことになるのです。

この説教の初めに、電車の中で泣く赤ちゃんの話をしました。自分の「静かに過ごす権利」を主張するのか、それとも、赤ちゃんとお母さんが困難な状況にあることを理解し、思いやりを示すのか。私たちの社会は、権利と権利がぶつかり合う社会です。しかし、キリスト者は、自分の権利を喜んで手放してでも、隣人を愛し、仕える道を選ぶようにと招かれています。

愛は人を育てます。私達一人ひとりが、【主】から与えられた知識と自由を、自分の正当性を主張するためではなく、互いに愛し合い、共に成長していくために用いる者とされますように。そして、私達の教会が、愛によって互いを建て上げ、キリストの体として成長していく群れとなりますように、共に祈りましょう。